

本報告書の要約

第1章 高校生の学習に関する意識・実態

第1節 高校生の学習行動

1. 学校での学習の様子

① 好きな教科・嫌いな教科

高校生が好きな教科のベスト・スリーは、①「体育」66.5%（「とても」＋「まあ好き」）、②「音楽」47.4%、③「地歴」46.7%。逆にワースト・スリーは、①「公民」25.6%、②「美術」35.4%、③「数学」38.7%である。時系列的にみると、「国語」「理科」「体育」「家庭」の4教科で「好き」とする者が増加している（図1-1-1、2、表1-1-1）。

② 授業の理解度

授業を「ほとんどわかっている」と「70%くらいわかっている」の合計数値の順に並べると、①「国語」44.9%、②「地歴」38.5%、③「英語」38.3%、④「数学」32.6%、⑤「理科」31.6%、⑥「公民」23.2%となる。時系列的にみると、4教科中、「国語」「理科」「英語」の3教科で、授業の理解度の上昇傾向がみられる（図1-1-3、4、5）。

③ がんばって勉強したい教科

①「英語」79.7%、②「数学」69.6%、③「理科」37.9%、④「国語」36.0%、⑤「地歴」24.2%を、これから特にがんばって勉強したい者が多い。「公民」を除く非実技系教科に、回答が集中している（表1-1-2）。

④ 文理のコース

現在のコース選択は、「文系」47.8%、「理系」38.5%、「どちらでもない・未定」12.2%という状況である。男子で、また学校ランクが上位であるほど、「理系」の比率が高い（図1-1-6、7）。

⑤ 高校3年間で履修する予定の科目

科目によって履修（予定）率の差は大きく、半数を切っているのは、「数学Ⅲ」「物理」「地学」「地理」「公民全科目」である（表1-1-3）。

⑥ 授業の受け方

時系列的にみると、受講態度の積極化と授業中の逸脱行動の減少を示唆する変化が現れている。「黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く」（第1回58.1%→第3回68.4%）、「授業でわからないことは、あとで先生に質問する」（27.6%→36.6%）が増加した。他方で、「近くの人とおしゃべりをする」（56.2%→38.1%）、「マンガをかいいたり、文房具で遊ぶ」（31.1%→17.7%）は減少をみた（図1-1-8、9）。

⑦ 好きな学校の勉強方法

生徒たちが好む勉強方法（授業のタイプ）は、①「先生が黒板を使いながら教えてくれる授業」82.1%（「とても好き」＋「好き」）、②「友だちと話し合いながら進めていく授業」60.8%、③「グループで何かを考えたり調べたりする授業」51.3%、④「ドリルやプリントを使ってする授業」50.8%である。グループ学習や友だちとの話し合いを好む生徒は半数を超えているものの、

昔ながらの黒板を使って先生が教えてくれる授業が圧倒的な支持を得ている(図1-1-10、11)。

2. 家での学習の様子

① 家庭学習の頻度

週あたりの家庭学習の日数は、「ほとんど毎日する(6～7日)」19.5%、「週に半分以上はする(4～5日)」24.3%で、「家ではほとんど勉強しない」は23.1%と4人に1人に近い。時系列的にみると、「ほとんど毎日する」が28.2%(第1回)から19.5%(第3回)へと減少し、逆に「家ではほとんど勉強しない」が17.3%から23.1%へと増加をみた。学校ランクによる差も大きく、下位ランク校では家庭での学習習慣をほとんど持たない生徒たちが多数派を占める(図1-1-12、13)。

② 家での学習時間

平日の学習時間の平均は71分、日曜日の学習時間は87分、平日のテレビ視聴時間は112分である。平日の学習時間について分布をみると、もっとも多いのが「ほとんどしない」の22.8%。これに「およそ30分」14.3%と「1時間」20.4%を加えた1時間程度以下の学習時間の者は、合計6割弱(57.5%)に及ぶ。反対に、3時間以上学習する者は、1割を切る。学習時間は学校ランクが下がるにつれて激減する傾向にある。

平日の学習時間(平均)を時系列的にみると、第1回調査92分、第2回調査77分、第3回調査71分で、約10年間に2割強の減少をみた。「ほとんどしない」は第1回調査16.8%から第3回調査22.8%へと増加し、「3時間以上」は17.8%から8.7%へと半減した(図1-1-14、15、16)。

③ テスト勉強の開始時期

テスト勉強の開始時期は、「1週間くらい前から」35.5%、「10日くらい前から」16.4%、「4～5日くらい前から」14.1%で、1週間くらい前を中心としてその前後から始めるのが一般的である。「ほとんどしない」は2.1%、「当日の朝くらい」は1.0%とごく少数派である(図1-1-17)。

④ 家での勉強内容

家でする勉強の内容として半数を超えているのは、第一に「学校の宿題」81.4%、第二に「学校の授業の予習」64.5%である。この2つ以外はいずれも4割を切っており、高校生の学習が学校中心、予習中心であることがわかる。第1回調査から第3回調査にかけて、予習中心の傾向がますます強まった(「学校の授業の予習」第1回55.1%→第2回59.2%→第3回64.5%)(図1-1-18、表1-1-4)。

⑤ 家での学習の様子

「あてはまる」「まああてはまる」の合計比率が大きい順に、「出された宿題をきちんとやっていく」(78.8%)、「家族に言われなくても自分から進んで勉強する」(74.5%)、「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」(65.0%)、「自分で興味を持ったことを、学校の勉強に関係なく調べる」(64.2%)、「予習をしてから授業を受ける」(60.9%)と並ぶ。概して、肯定的に家庭での学習態度を評価する回答が目立つ。時系列的にみると、「予習をしてから授業を受ける」「家族に言われなくても自分から進んで勉強する」「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」「出された宿題をきちんとやっていく」と答えた生徒が増加した(図1-1-19、20、21)。

⑥ 日常生活の中での「学習」

第1回調査と比較してみると、頻度が小さくなったのは「新聞のニュース欄を読む」(71.6%→52.7%)、「歴史小説や歴史の本を読む」(30.5%→22.2%)、「読みたい本を本屋で探して買う」(67.4%→61.0%)などである。ことに、新聞のニュース欄を読む高校生は激減した(図1-1-22、23)。

⑦ 家庭環境

保護者の高学歴化を示す項目で変化が大きい。さらに、「ほとんど毎日、家の人は私に『勉強しなさい』と言う」は、第1回調査22.1%から第3回調査16.2%へと減少している。(表1-1-5)

3. 学校外の学習機会

① 学習塾・予備校の利用

放課後や日曜日に学習塾、予備校に通っているのは、全体で19.8%。第1回調査12.7%、第2回調査15.0%、第3回調査19.8%と着実な上昇傾向にある。塾の種類は「進学塾」が46.1%、「補習塾」が40.5%とほぼ拮抗している。1クラスの人数は、「5人以上」が50.5%とおおよそ半数を占め、「少人数(2~4人)」が23.7%、「個別指導(1人)」は21.5%である。週2日が平均的な通塾日数であり、大半が3日以内となっている(図1-1-24、表1-1-6)。

② 諸学習機会の利用

「今年の夏休みに、学校が行う補習授業を受ける予定だ」が45.7%と圧倒的に多く、これに「『進研ゼミ』のような通信教育を受けている」19.5%、「学校で朝や放課後の補習授業を受けている」19.3%が次ぐ。「今年の夏休みに、塾や予備校の夏期講習に行く予定だ」は15.3%で、第1回調査と比較して倍増した(図1-1-25、26)。

4. 学習の方法

① 学習の方法

高校生の学習方法は、ここ約10年間に、次のように変化した。①「教科書やテキストをくり返し読む」が大幅に増加、②「教科書や参考書を整理して自分のノートを作る」がやはり大きく増加、③「辞書(英語・国語など)を引く」が減少、④「教科書ガイドを使う」が減少した(図1-1-27、28、表1-1-7)。

② 学習方法のタイプ

高校生に支配的な学習方法は、①「通信教育、学習塾の教材や自分で買った教材中心」(8.0%)よりも「学校で使う教材中心」(91.1%)、②「市販の要点整理などを使う」(14.2%)よりも「自分で整理しながら勉強する」(84.6%)、③「毎日こつこつ勉強する」(16.3%)よりも「試験の前にまとめて勉強する」(83.2%)である。ここ約10年間で、高校生の学習は、「予習中心」派がほぼ半数近くまで増加し、また「問題集中心」の傾向に拍車がかかった。上位ランクの高校生の学習方法の特徴を示すキーワードは、「こつこつ・じっくり・読む」である(図1-1-29、30、表1-1-8)。

③ メディアの利用

時系列的にみると、「家でパソコンを使う」(「よくある」+「時々ある」)が第2回調査21.2%から第3回調査55.4%へと急増を示した。これに対して、「学校でパソコンを使う」は9.5%から12.1%へと微増したにすぎない。「家でインターネットを使って何か調べる」は39.1%で、家庭に比べて学校におけるパソコンやインターネットの利用は低調である(図1-1-31、表1-1-9)。

第2節 高校生の学習観・成績観

1. 成績観

① 成績の自己評価

成績の自己評価は、「真ん中」とその前後のカテゴリに6割が集中。「上のほう」よりも「下のほう」に偏った分布を示す。時系列的にみると、第1回調査以降、成績の自己評価は、徐々に下方へとシフトする傾向をみせている（図1-2-1）。

② とりたいと思う成績・がんばればとれると思う成績

とりたい成績（アスピレーション）は、上位3カテゴリ（「1」「2」「3」）にほぼ9割が集中し、「真ん中」から下の成績でよいと答えた生徒は約1割にとどまる。成績に対するアスピレーションは、かなり高い水準にある。学業的能力の自己概念についても、現在の成績はともかく、がんばって自分の能力をすべて発揮したとすれば、8割以上の生徒が学年で中の上より上位の成績がとれると考えている。高校生の学業面での能力の自己概念はかなり高いと考えられる。

ただし、時系列的にみると、とりたいと思う成績もがんばればとれると思う成績も徐々に下方へシフトしている（図1-2-2、3、4、表1-2-1）。

③ 成績観・学力観

「ふつうの生活（ほどほどの学力）志向」と「名門大学志向」が突出して高い比率を示す。「勉強本位志向（今は勉強することが一番大切）」は、5人に1人の割合である。第2回調査と比較して「ふつうの生活（ほどほどの学力）志向」が56.2%から45.3%へと大きく減少し、また第1回調査以降「勉強本位志向」が一貫して減少している（25.4%→23.9%→19.5%）。「名門大学志向」は上位ランクの高校ほど強く、逆に、「ふつうの生活（ほどほどの学力）志向」「ともかく合格志向」「学校生活エンジョイ志向」は、いずれも学校ランクが下位の高校ほど強い（図1-2-5、6）。

④ よい成績をとるのに大切なこと

よい成績をとるのに大切なことベスト・スリーは、「努力」88.0%（「とても大切」の割合）、「上手な勉強法」78.8%、「授業をしっかり聞く」78.7%である。ここには高校生の成績や学力の向上における、精神（努力）主義（努力と強い意志）、自分主義（運や人の助けではなく自分の努力や態度が大切）、学校（日常的構え）重視、技術主義（上手な勉強法）が現れている。時系列的にみると、多くの項目で「とても大切」とする回答が増加していることが目立つ。あれもこれもが成績を向上させる上でより大切だと認識されるようになっている（図1-2-7、8、9、10）。

2. 学習していて感じること

「生き物や自然を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」76.8%（「よくある」「時々ある」の合計）、「国語の教科書を読んでいて、登場人物や書いてある内容に興味がわいてくる」62.4%、「社会のしくみや歴史のできごとを『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」61.8%など、「すばらしい」とか「ふしぎだ」と感じる経験は多い。しかし、自然や社会について、「調べたり考えたりする」ことが「好き」と答えた回答は少ない。「すばらしい」とか「ふしぎだ」と思った知的体験を、自ら調べたり考える学習行動へと、いかにして結びつけるかが課題となっている（図1-2-11、表1-2-2）。

3. 学習上の悩み

悩みのトップ・スリーは、①「上手な勉強の仕方がわからない」64.2%、②「どうしても好きになれない科目がある」61.0%、③「こつこつと努力できないで困る」60.5%である。第1回調査以降、「わかりやすい授業にしてほしい」(第1回34.3%→第2回45.2%→第3回50.5%)と「どうしても好きになれない科目がある」(56.5%→58.8%→61.0%)が増加し、「勉強する科目を自分でもっと選択できるといい」(39.1%→40.3%→31.4%)「先生は成績にこだわりすぎる」(27.5%→26.6%→14.1%)「親の期待が大きすぎる」(20.2%→16.1%→12.3%)が減少をみた。後二者は、いずれも成績の向上や学習に対する、親や教師からのプレッシャーの低下を反映したものと考えられる(図1-2-12、13)。

4. 進路・進学意識

① 希望する進学段階

78.4%が四年制大学や大学院まで(「四年制大学まで」69.9%、「大学院まで」8.5%)を希望し、「専門学校・各種学校まで」10.5%、「短期大学まで」2.8%、「高校まで」3.9%となっている。時系列的にみると、①四年制大学、大学院の微減、②短期大学の減少、③専門学校・各種学校の増加がみられる(図1-2-14、15)。

② 希望する大学のタイプ

希望する大学は、①「難関ではない国公立大学」49.9%、②「難関の国公立大学」26.6%、③「難関ではない私立大学」10.8%、④「難関の私立大学」5.3%の順に並ぶ。全体に、国公立大学進学希望が優勢だが、ことに上位ランク校と中上位ランク校でその傾向が強い(図1-2-16、17)。

③ 希望する入試の方法

入試の方法は、58.2%が「できれば一般入試で」、39.1%が「できれば推薦入試(AO入試)で」を希望している。推薦入試の希望率は、下位ランクの高校ほど多い(図1-2-18)。

第2章 学習に関する意識・実態と学力の関連

第1節 高校生の学習行動と学力

1. 学校での学習の様子と学力

① 教科の好き嫌い・授業の理解度と学力

教科の好き嫌いと学力は相関しており、その教科が好きな生徒ほど学力が高い。また、生徒の主観的な授業の理解度は、客観的な学力階層を反映している(図2-1-1、2)。

② 文理のコースと学力

学力は理系優位である。「理系」に比べて「文系」の希望者に、学力下位層が多い(図2-1-3、4)。

③ 授業の受け方と学力

より積極的な受講態度や授業への集中が、高い学力と結びついている(図2-1-5)。

2. 家での学習の様子と学力

① 家庭学習の頻度・家での学習時間と学力

家での勉強を「ほとんど毎日する」生徒の47.1%が「学力上位階層」で、「家ではほとんど勉強しない」生徒のうち43.1%は「学力下位階層」である。1日あたりの平均学習時間（平日）は、「学力上位階層」から順に105.3分→85.8分→77.7分→69.3分→44.5分と減少する。同一の学力階層の生徒であっても、上位ランクの高校のほうが学習時間が長くなる（図2-1-6、7、8）。

② 家での勉強内容と学力

学力上位層ほど、家で「学校の授業の予習」を行う生徒が多く、また「塾や予備校の授業の予習・復習」「書店などで売っている問題集・参考書」を使った勉強をする生徒が多い（図2-1-9）。

③ 家での学習の様子と学力

「授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」ことや「予習をしてから授業を受ける」ことは高い学力と関係している（図2-1-10）。

3. 学校外の学習機会と学力

① 学習塾・予備校の利用と学力

塾・予備校の利用率は、「学力上位階層」29.7%、「中上位階層」24.9%、「中位階層」19.2%、「中下位階層」22.1%、「下位階層」12.3%と、おおむね学力上位層ほど高い。通っている塾・予備校のタイプは、学力上位層は「進学塾」に、下位層は「補習塾」に分化している（図2-1-11、12）。

② 諸学習機会の利用と学力

「通信教育」は、「学力上位階層」から「中下位階層」までは2割強で横並び、「学力下位階層」のみ15.7%と低い。「塾や予備校の夏期講習」は、学力上位層ほど利用率が高い（図2-1-13）。

4. 学習の方法と学力

① 学習の方法と学力

学力上位層ほど、「辞書（英語・国語など）を引く」と、「プリントや問題集で数学の問題練習をする」の頻度が高い（図2-1-14、15）。

② 学習方法のタイプと学力

学力の上下によって、学習頻度や時間が異なるだけでなく、学習の方法においても質的な相違がある（図2-1-16）。

第2節 高校生の学習観・成績観と学力

1. 成績観と学力

① 成績の自己評価と学力

主観的な成績評価は客観的な学力偏差値と相関はするが、完全に一致しているわけではない。上位ランク校、中上位ランク校で相関が高く（主観的な成績評価と客観的な学力偏差値の一致度が高い）、中下位ランク校、下位ランク校では相関が低い傾向がある（表2-2-1、2）。

② とりたいと思う成績・がんばればとれると思う成績と学力

成績アスピレーション（とりたいと思う成績）は、学力上位層ほど高い。また、学業的能力の自己概念（今の成績はともかくうんとがんばればとれると思う成績）も、学力上位層ほど高い。しかし、がんばれば校内で中位以上の成績がとれると、大多数の生徒が考えている（図2-2-1、2）。

③ 成績観・学力観と学力

学力上位層ほど、「名門大学志向」「勉強本位志向」が強い。逆に学力下位層ほど、「ふつうの生活（ほどほどの学力）志向」「ともかく合格志向」「学校生活エンジョイ志向」が目立つ（表2-2-3）。

2. 学習上の悩みと学力

学力下位層ほど、多くの学習上の悩みを抱えている。特に、学力上位層と比べて下位層では、「上手な勉強の仕方がわからない」「努力しても成績が思うように上がらない」「どうしても好きになれない科目がある」「もっと科目の数を減らしてほしい」という回答が多い（図2-2-3）。

3. 進路・進学意識と学力

① 希望する進学段階と学力

「大学院まで」および「四年制大学まで」を希望する生徒は、学力が下がるにつれて減少し、代わって、「短期大学まで」と「専門学校・各種学校まで」が増加する。しかし、上級学校への進学は、学力のみによって決まっているわけではない。「高校まで」を希望する生徒のうち、55.0%は「学力下位階層（最下位）」だが、「学力中上位階層」「学力上位階層」の生徒も、合わせて12.5%いる。「学力下位階層」の生徒の比率がもっとも大きいのは、「高校まで」（55.0%）ではなく、「専門学校・各種学校まで」（59.0%）である。

セカンド・ベスト（中上位ランク校）以下の高校では、学力が下がるにつれて、大学院・四年制大学希望率が低下する。上位ランク校では、「学力下位階層」でも9割以上の生徒が「大学院・四年制大学」を希望している。上位ランクの高校では、学力にかかわらず生徒たちを四年制大学への進学へと水路づける学校風土（校風）が優勢である（図2-2-4、5、6）。

② 希望する大学のタイプ・入試方法と学力

学力が下がるに伴い、「難関ではない大学」と、「私立大学」の希望者が多くなる。入試の方法は、学力上位層ほど「一般入試」を希望する生徒が多く、下位層ほど「推薦入試（AO入試）」が多い（図2-2-7、8）。